ニューヨークのユダヤ人たち I

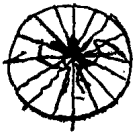
ある文学の回想 1940-60

A.ケイジン著
大津栄一郎・筒井正明訳

ニューヨークのユダヤ人たち I

—ある文学の回想 1940-60—

A. ケイジン著
大津栄一郎・筒井正明訳



岩波現代選書

ニューヨークのユダヤ人たち I　岩波現代選書 126

一九八七年四月二四日　第一刷発行©

定価一九〇〇円

訳者　大津栄一郎
　　筒井正明

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話 〇三-二六二-四一一一
振替 東京六-五三〇〇

印刷・理想社　製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004795-7

目

次

1　ことば……1
2　ミッドタウンとグリニッチ・ヴィレッジ……69
3　お前は自分の生活を変えねばならないのだ……139
4　戦時の旅行……197
5　イギリス――最後の戦闘……233

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

〔II巻目次〕

6　かつてない幸福な時
7　時代なればこそ
8　新生活
9　六〇年代の青春
10　ことば
訳者解説
あとがき

1 ことば

この橋を渡ってしまうと、どんなことでも、およそ、どんなことでも起こりうるのだとぼくは思った。

――『偉大なギャツビー』――

一九四二年の、夢のようなある週、ぼくは最初の著書『生国の土の上で』(邦訳は大橋健三郎氏ほか訳『現代アメリカ文学史』南雲堂)を出して、『ニュー・リパブリック』誌の編集者のひとりになり、妻のナターシャとレキシントン街二四丁目の小さなアパートに移った。窓からは馬具用品一式を売っている店が見えた。こちら側から見ると、手綱の銀の止め金やぴかぴか光った鞍や馬勒で、店全体が光っているように見えた。店の前には黄色に塗った、前脚をあげて躍り上がっている、まことに愛想のいい馬の像があった。

マンハッタンに住むのは、初めてだった。大都会のまっただなかで暮らし始めてからの数週間というもの、目のくらむような昂揚した気分と未来への恐ろしい不安の混ざりあった気持で、わが家とレキシントン街二八丁目の出版社とマディソン街四八丁目の『ニュー・リパブリック』社の間を往復した。世の中は戦争で急に豊かになっていた。

やがて警戒燈火管制で暗くなるビル街の上空に美しいニューヨークの秋空がまだ暮れなずんでいる菫色のたそがれどきなど、オフィスを出て、グランド・セントラルのランプの下の環状道路を四番街に向かってタクシーを飛ばしていると、これで助かったという気持がアーチをくぐり抜けるたびの燈火のように心のなかに点滅した。ぼくは契約した本の前払い金の多さに仰天していた。それにその本がやがて『ニュー・リパブリック』社での地位を相当に引き上げてくれることにもなった。ニューヨークの中心で働いてマンハッタンに住めるのも嬉しかった。ラッシュアワーにタクシーで帰っていると、戦時下のニューヨークではあっても、そこに住む楽しさを最初の一杯のマテニーのように心ゆくまで味わうことができた。だが四二丁目の図書館で過ごした長い孤独な日々も懐しかった。いつなんどき徴兵されてもいいという覚悟はできていた。幸運がそれほど長つづきするとは思っていなかった。

ぼくがその本を書き始めたのは、市役所（シティ・ホール）で結婚式をあげてすぐの、ブルックリン・ハイツのひと部屋のアパートだった。結婚したのは一九三八年で、ぼくたちは二三歳で、知り合って二週間しかたっていなかった。ナターシャはベルヴュー病院で細菌学の学位をとろうとしていた。ぼくたちはふたりとも自分が育った環境から逃げ出そうとけんめいだった。新婚の夫らしい満足感で筆をとり始めたのだが、すぐこれこそ自分に自然な主題だという気持になっていた。ぼくが書いた最初の書評や文芸評論を気にいってくれたカール・ヴァン・ドーレンが与えた、なに気ない示唆のおかげだった。彼はあるとき、どうして二〇世紀の「新しい」アメリカ文学について、その誕生を歴史的に説明するような

研究がないんだろうと疑問を洩らしたのだった。

それから五年近く、ニューヨーク公立図書館の広い一般閲覧室の三一五室で、それもだいたいは朝の九時から夜の一〇時までの長い閲覧時間のあいだじゅう、その本のために努力した。ときどきは、コロンビア大学で学位を取るため『アメリカ思想における社会ダーウィニズム』を書いていた友人のリチャード・ホフスタッターと通りの向こうの自動販売(オートマット)の店に行って、急いで昼食をつめこんだり、運動に夕方の「警戒燈火管制」下の五番街を走ったり、タイムズ・スクエアから入った玉突き場に行ってあわただしくピンポンをしたりした。だがすぐ、本を山積みにしたまま、その上に「すぐ帰ります。このままにしておいて下さい」という書き置きを残して出た、いつも新しいニスの匂いのする三一五室の大きな黄色いテーブルに戻った。ぼくたちは毎週一度は午後ブロードウェイのトランスラックス・ニュース劇場に行って、デトロイトの組立工場から新品の重戦車が自動車なみに次々に出てくるのをのんびり見ていることができる特権を厳粛に祝福しあった。ぼくたちの世代を救うため戦争が、聖戦が始まっていた。戦争ほどありがたいものはなかった。

ぼくはブルックリン・ハイツの台所用テーブルで、ロングアイランド・シティの高架鉄道(エル)に近い四一丁目で、一九四〇年の夏にはプロヴィンスタウンで、前年の夏はサラトガのヤッドー〔芸術家村〕でと、書きつづけた。ヤッドーでは、駅に向かってユニオン街を歩いて行くナターシャを近づく悲しみの予感で目を泣きはらして見送った。ぼくはほとんど五年近く学者的無邪気さで、一九三〇年代のラディ

カルな確信をその本に残したいという思いがけない知的信念で、暮らした。地下鉄と三一五室を、ブライアント・パーク〔ニューヨーク公立図書館に隣接する公園〕と三一五室を、オートマットの店のコーヒー売場の前と三一五室を、ベルヴュー病院のナターシャのインフルエンザ研究室と三一五室を、往復して暮らした。

五番街に面する大きな大理石の階段を登って行くとすぐ、こうあった。「われわれの自由な制度の永遠の存続は、いつに、国民への教育の普及にかかっている」。それは、五番街に面する門扉の上から、金文字で、広いホールに入って行くわれわれに語りかけている。入口にはまたこうも書いてあった。「図書館開館時間、年中無休。月曜日―土曜日、午前九時―午後一〇時。日曜日、午後一時―午後一〇時。」

くる年もくる年も昼は毎日の大部分を、夜もたいてい、その黄金色のテーブルに坐って自分のテーマを四方八方からひねくり回すのだけを楽しみとして暮らした。ぼくに時間さえあれば、図書館はいつでも扉を開いてぼくが来るのを待っていた。話に聞いていたり、見たかったりした本はぜんぶ揃っていた。「現代的なもの」というぼくの主題に通じる南北戦争後の発芽期の数十年間に出たアメリカ小説の初版本。一八九〇年代にはまだ青年で、ささやかながらリアリズム運動を助けた、すでになくなって久しいシカゴの出版業者たちの古い出版目録。聖フランシスと異端審問所がちがうように後のスターリン主義者たちの『ニュー・マッシズ』誌とはまったくちがう、古い『マッシズ』誌（一九一一

年―一八年)の手つかずのバックナンバー。性的に不道徳ないまわしい本だなどと非難する臆病な雑誌なのに、それに自作の『シスター・キャリー』が同じ理由で散々な目にあったのに、セオドア・ドライサーが不名誉な失意時代しばらく編集を手伝ったあの『デリニエイター』誌。一九一四年に雑誌を引き受けたときメンケンとネイサンが言った言葉を借りれば、「うすのろたちのための雑誌ではない」『スマート・セット』誌。イエロー・ジャーナリズム(煽情的な新聞・雑誌)の横行した一八九〇年代に、それもそれがとくに烈しかったシカゴで出版され、そして当時のシカゴをあるがままに映し出そうとしたのでやがてあれほど多く力強い小説がシカゴから生まれる契機となった『チャップ・ブック』誌。一九〇〇年になってもまだデイジー・ミラーのようなすばらしいアメリカ娘にいやらしい男と夜コロセウムを散歩させたと言ってヘンリー・ジェイムズの非アメリカ的不道徳性を非難している気取った女流文筆家たちの文章ののっている、忘れられたパンフレット類。ドス・パソスがやがて「ウィルソン氏の戦争」と呼ぶようになる戦争に反対したかどで、ランドルフ・ボーンやユージーン・ヴィクター・デブズやマックス・イーストマンやアート・ヤングや、また多くの社会主義の作家たちが、政府に逮捕された様子を伝えている、手に入るかぎりの記事。アプトン・シンクレアの、米食で頭痛は治るという、またおおぜいのアメリカの作家たちが直面しているアルコールによる破滅をどうして避けるかという長い医学的助言。また、ジェイムズ・ハネカー、ヘンリー・メンケン、ウィラード・ハンティントン・ライト、アーヴィング・バビット、ポール・エルマー・モア、エドマンド・ウィルソン、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

R・P・ブラックマー、アレン・テイト、そして彼らの信奉者たち、そしてまたその信奉者たちの信奉者たちの、ほとんどあらゆる問題についての議論。

だから一九三八年から一九四二年までぼくは朝晩五番街をよぎって、「されどついの勝利を得るものは真理なり」〔聖書外典「第一エズラ書」より〕という銘文のかかっている正面玄関を通り、ルネッサンス時代の地図や初期刊本（インキュナブラ）〔一五〇〇年以前にヨーロッパで活版印刷されて現存する本〕やディケンズの手紙が興味深く陳列してある広いホールを通っていった。そしてエレベーターを待つのがもどかしいので、カレルとヘイスティングズが一八九八年に設計した堂々たる建物にふさわしい、なめらかな美しい大理石の階段をかけのぼって、『失楽園』を娘たちに口述する盲目のミルトン」を描いた巨大な壁画の前を通り、ニューヨーク市のイコンとしてアイザック・ニュートン・フェルプス・ストークスが集めたニューヨークの火事と消防士たちを描いた版画がずらりと並んでいる三階のホールを通って、手垢によごれた無数のカードのつまった整理箱が壁から壁まで並ぶ広い目録室に入っていった。

ぼくは大恐慌期のさなかに、現代アメリカの精神を探ってきわめて野心的な文学史・知性史を書こうとしている、いわば無給の専任研究員で、どこにも発表するあてのないフリーランスのライターで、夜学の臨時講師だった。三一五室はぼくの知的武器庫だった。プライバシーは完全だった。受付の人間は、なぜぼくが一八九七年のシカゴやサンフランシスコの反逆的な出版社にかんする、急速に色が褪せて黄色くなった、ぼろぼろの資料を見る必要があるのかなどと訊いたりしなかった。一九一二年

の『ポエトリー』の創刊号や、一九一四年の『ニュー・リパブリック』誌や、セオドア・ローズヴェルト時代の暴露専門の『コリアー』誌や、チャールズ・A・ビアド教授の『合衆国憲法の経済学的一解釈』にたいするニコラス・マレー・バトラー学長の不満や、バトラー学長が「ウイルソン氏の戦争」にたいする反対を露骨に抑えにかかって、その結果ビアド教授がコロンビア大学を辞めるにいたるいきさつの資料や、セオドア・ドライサーの『天才』にたいするジョン・S・サムナーの反悪徳同盟の攻撃や、アルフレッド・A・クノップが臆病な書店に自社出版の新進の英米の小説家の作品を店頭に置いてほしいと頼んだいきさつや、ピークト・ヒル・バー沿岸警備隊基地の近くの大西洋に面するプロヴィンスタウンの砂丘でひと夏を過ごしたユージーン・オニールの生活を伝える資料などを頼んでも、なんの研究か知らないが、もう少し手に入れやすい資料で間に合わせられないのかなどと言う者はいなかった。

ニューヨーク公立図書館の「常連」のひとりとしてぼくは、フランク・ダブルデイ夫人が夫にダブルデイ・ペイジ社刊の『シスター・キャリー』の発売を抑えさせたことや、ダブルデイ社の編集者のひとりのフランク・ノリスがその邪悪な書物を書評用に一冊こっそり持ち出そうとしたことや、一九一八年に「文学者」たちがH・L・メンケンは「親独派」だと宣伝し、その攻撃があまりに個人的だったため一九四〇年までメンケンがヒットラーを弁護していたということや、性的にまた政治的にラディカルな「新しい学生」によって、古い伝統にしばられたアイヴィー・リーグの大学にすら、新し

い雑誌や出版部や実験劇場が作られたことなどを知った。またエドマンド・ウィルソンがプリンストンの学生だったころ同級のスコット・フィッツジェラルドをどう思っていたかや、スペイン内戦のとき共産主義者がアナキストや社会主義者を処刑するのを見て、その恐怖で――友人のヘミングウェイは平気だったが――ドス・パソスが急速に右傾したことなどを知った。

「それがぼくの中西部だった」と、フィッツジェラルドは、筆の運びが遅くなる『偉大なギャツビー』の最後のところで悲しんでいる。シカゴを直接知るようになるなん年も前からぼくは、中西部出身の先駆的なリアリストたちが希望と覇気と新しい知力を持って、われわれがこれから生み出すもの以外にアメリカ文学はないのだと叫んでいるのを知っていた。ぼくの主題は、「現代的なもの」を民主主義と規定して、アメリカそのものを現代的なものの代表として見ること、そして一九世紀末をその偉大な準備期として見ることだった。それを、従順そうな若い新聞記者や法律事務所の書記や図書館員や教師がやがてウィラ・キャザーやロバート・フロストやシンクレア・ルイスやウォーレス・スティーヴンズやメアリアン・ムーアになるとはだれひとり思った者のいない、淋しい小さな町や大平原地帯の村や田舎の大学や埃っぽい法律事務所や全国的な雑誌や地方の「学園」に、見ることだった。新しい文学は古い――誇り高く、激しく、それでいて優雅な――世紀の内部で創造されたのだ。その優雅さは図書館の広いホールに、大理石の階段に、またそこを飾っている、ニューヨーク公立図書館に変わる前の一九世紀半ばの貯水池や赤い自動車に乗った昔の消防士たちやバッテリー公園からの伝

統的な風景などの絵に、残っていた。それらはぼくを図書館が建設された世紀末の頃に、ぼくの本の基盤となる知的反乱とラディカルな希望の時期に、連れ戻した。どちらも二部屋をぶち抜いた一対の広い読書室さえ、ぼくが命をかけてもと憧れた逞しく楽しい時代を、ぼくの主人公たちが異邦人のようにさまよい歩いた逞しい世界を、実感させた。

戦争で大恐慌時代に終止符が打たれる前の——戦争までとうとう終わらなかったのだ——気楽なラディカリズムの時代に、失業者の、また気違いじみたイデオロギー信者や開架の棚の参考書に「この嘘つき！」とがんこに書きこむ同じように気違いじみた聖書研究者の、またあるかぎりの百科辞典を読みあさるパズル・ファンの、またニューヨーク市紳士録から住所欄をこっそり破りとる歩合セールスマンなどの避難所で憩いの場だった図書館で、読書し思索にふけるのは楽しかった。

マッカーサー元帥のように禿げた頭にわずかな髪をきれいになでつけていた小男は——一九三八年から一九四二年まで、毎日ぼくが入って行くとかならず読書室にいて、ヘブライ語訳、ギリシャ語訳、ラテン語訳、英語訳、フランス語訳、ドイツ語訳が六段に並んだ大版の聖書をかすかにほほ笑みながらじっとみつめていた小男は——どうなっただろう。あるいはマクシム・ゴーリキーの「ボレス」を連想させた、やせた、醜い、金切り声をあげる気違い女——代書人に恋人への情熱あふれる恋文を代筆させ、その返事をまた代書人に書かせていた、ヒステリックなオールドミスの女——は？　彼女はいつも、隣りで本を読んでいる男が彼女を誘惑しようとしていると言って怒っていた。気違いじみた

満足そうな微笑を浮かべて叫んだものだった。「ここは図書館なのよ。坊や！　本を読むところよ。よおく覚えておいてよ！　坊や！」

街の哲学者、狂信者、広告代理人、宿なし――群衆のなかの通りすがりの顔々。なにかを求めて三一五室に入って来て出て行くひっきりなしの群衆のまっただなかで、パズル・コンテストや美人コンテストやサンディ・フック岬沖に隠された宝探しのための調べものや、ニューヨークの古い家系一覧やピッツバーグの電話帳で死んだあるいは行方不明の親戚を探しに来ている恐慌下の群衆のまっただなかで、本を読んで観念を練るのは楽しかった。このおびえた恐慌下の群衆に囲まれて本を読みながら、開架の書棚のアメリカ作家の部のすぐ脇の長い黄金色のテーブルに坐って、ぼくも同じように名声と富を手に入れようと狙っていた。周りの群衆の苦しみを肌で感じることができた。昼も夜も不安な飢えた人間たちの足音を聞くことができた。そうした、あてもなく、とまどいながら、あわてふためいて「機会」を探している人間たちの飢餓感にぼくも巻きこまれていた。ぼくには彼らは気が狂っているように見えたが、同じように彼らにも、ぼくは気が狂っているように見えたにちがいない。頼みさえすれば、だれもが手に入れたがっているウィリアム・ディーン・ハウエルズやヘンリー・ジェイムズやスティーヴン・クレインやジョーゼフ・カークランドやロバート・ヘリックやエド・ハウやヘンリー・ブレイク・フラーやフランク・ノリスやセオドア・ドライサーやジャック・ロンドンの書物がなんでもすぐ手に入るのを知ったときは、興奮で広いホールを飛びはねるように歩き回った。ぼ

くはそれらの本の背後の精神を読みとることができた。それらの本に自分が直接つながっているような気がした。それらの本を書いた目に見えない人間、遍在する精神と、ぼくの間には、なにか生きた精神感応（テレパシー）があった。ぼくは感応に飢えていた。いつも飢えていた。手を伸ばせばとどくところに並んでいる多くの精神への憧れで、落ち着くことができなくて、どんなにしじゅう通りをよぎってオートマットの店に行って、パンとコーヒーを買って、悩みが多すぎて坐って食べる余裕のないニューヨーク市民にふさわしい立食用のテーブルでそれらを詰めこんでも、「すぐ帰ります。このままにしておいて下さい」という書き置きと本の山のもとに戻ると、またすぐ同じ飢えの苦痛で心を引き裂かれた。早朝のゆらゆら揺れている人けのない部屋には——大きな高い窓から光りがさしこんで、まるで塗り立てのような黄金色のなめらかなテーブルの表面を暖めていた——開架の書棚の本をぜんぶ借り出して、そのひとつひとつの精神のなかに飛びこみたいという欲望でぼくをせき立てるなにかがあった。ぼくの本はだんだん形をとり始めた。時代はぼくの味方だった。「われわれの自由な制度の永遠の存続は、いつに、国民への教育の普及にかかっている。」

ぼくも国民のひとりだった。ぼくは生身の肉体の下にかくれている歴史の骨格に触れたかった。自分がずっと読みつづけている一九世紀から今世紀にかけての書物のなかに、現代アメリカの発芽期を感じとって、魅せられていた。ぼくが作りあげようとしている構図の背後には、燃えるような暑い夏の一日の情景があった。移民たちが三等船室からニューヨーク港の埠頭に上陸しようとしている。一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo